

## 和解の神学

尹 哲 昊

ナグネ・訳

### I 序論

われわれは破れのある分裂した世に生きている。破れと分裂は、家庭、社会、国家、世界などのあらゆる領域において一般的な現象となっている。わが国では、家族の葛藤、地域での葛藤、貧富間の葛藤、労使間の葛藤が非常に深刻なものとなっている。韓半島は世界で唯一残された分断国家として、南北間の葛藤が最も先鋭な仕方で起こりつつある場であって、それゆえ最近には北朝鮮の継続的な核実験やミサイルの発射により、緊張と葛藤がいつそう高潮したものとなっている。<sup>(1)</sup>世界中至るところで葛藤や暴力が絶えず起こりつつある。第二次世界大戦以後、前世紀に起きた世界で最も残酷な暴力的事態の一つは、従属的葛藤によるルワンダでの集団虐殺である。一九九四年、多数を占める部族のフツ族によって大々的な集団虐殺が行われた結果、百余万名のツチ族が殺害され、数万名の女性たちが強姦され、それによってAIDS感染の被害者となった。<sup>(2)</sup>今世紀に入っても、宗教や人種間の葛藤、またそれに起因する暴力とテロは終わらないままである。最近では、イスラム教スンニ派武装集団のイスラム国（IS）が、キリスト教世界を対象に無

差別の民間人テロを行つて<sup>(3)</sup>いる。

和解に向けて希望の持てる知らせもないわけではない。最近、コロンビア政府と左翼コロンビア武装革命軍（FARC）は、半世紀以上にわたって継続されてきた内戦に終結をもたらす平和協定に最終合意した。コロンビアの内戦は、南米で最も長期にわたる左右武装闘争によって現在までに二六万名が死亡し、四万五千名が失踪した。カストロによって牽引されたキューバ革命に刺激を受けた農民軍指導者たちは一九六四年にFSRCを組織し、左翼政府の樹立を目標として、過去五二年間政府軍と闘ってきた。政府とFARCは平和協定に関する論議の終わりに、FARCの武装解除と合法政党の構成、内戦による犠牲者への補償、FARCの資金源であつた麻薬の流通を根絶することなどに合意した。<sup>(4)</sup>

破れあり、分裂した世にあつて生きていくわれわれには癒しと回復が必要であるが、この癒しと回復は和解を通してのみ可能となる。和解の主題には、家族の葛藤、社会階層（富める者と貧しい者、企業家と労働者など）間の葛藤、男女差別、障害者差別、人種差別、権力による暴力、性的暴力、民族の分裂、宗教間の葛藤などが含まれる。こうした諸問題によって破れと分裂のある現実の中で和解を追求することは、地上に神の国を具現するために神の宣教を实践することと一つである。

拙論は、破れ、分裂、葛藤、暴力という現実の中で、和解と平和をもたらすための道を公的神学の観点から模索しようとするものである。したがって、個人と個人の間における和解というよりは、集団と集団の間における関係において道徳的秩序を修復し、社会的関係を再樹立する過程としての和解の道を、真実、悔い改め、赦し、正義、癒しなどの諸概念との連関性の中で考察することとなる。

## II 公的神学としての和解の神学

キリスト教神学は、教会内信徒たちのための内的談論を提供するだけでなく、教会外の人々との意思疎通が理解可能な仕方でも可能となるものでなければならぬ。今日の和解に関する談論は、宗教的領域のみならず、社会政治的領域においても活発に成し遂げられつつある。宗教的な和解と社会政治的和解とを分離させて考えることはできない。キリスト教信仰は、具体的な社会政治的現実において暴力を拒否し、和解と平和を具現すべき公的課題を持っている。和解は共存すること以上のことである。和解とは、調和的關係の回復を意味する。和解は、加害者と被害者がもうこれ以上過去に縛られず、互いを受け入れ、相互の信頼を回復することをもって調和的關係を形成することである。和解は、神との垂直關係における個人的救いのみならず、隣人とこの世との水平關係における調和ならびに両者が一つとなるという問題である。すなわち、和解は単に個人的領域における私的主題のようなものではなく、社会政治的領域における公的主題なのである。社会政治的領域を含む全ての人間の公的領域は、神の普遍的和解の摂理の内にある。したがって、神との關係における和解は、この世との社会政治的關係における和解として具体化される必要がある。

教会成長とかりバイバルをもたらされた神の恵みとかいうことについては主日毎に言及していながら、社会で起こっている階層間の葛藤や人種差別、テロ、虐殺などについては一言も言及しないような牧会者たちが少なくない。同様に、自分の魂を救ってくださった神の恵みについては日毎に証ししながら、社会で起こりつつあるさまざまな葛藤や差別また暴力については大した関心を持たないでいるキリスト者たちも多い。ルワンダで対人種的虐殺が起こっていた時期に、ルワンダはアフリカで最も教会が爆発的な成長を遂げつつある国であった。またこの国のキリスト者たちは、自

己の救いに対する強い確信を持った、非常に福音的な信仰者たちであった。しかし、教会はこの大量虐殺という悲劇を妨げるために大した役割を果たし得なかったし、そればかりか、はなはだしきは聖職者たちや多くのキリスト者たちがこの虐殺に参加したのであった。

不義なる社会的現実を変革することとは無関係な、個人的繁栄や来世における救いのみを約束するような現実逃避的な福音は、安価な恵みあるいは虚偽の福音である。神の宣教は、この世を離れてではなく、傷で染みができ、混乱し、腐敗したこの世の真ん中で、あらゆる破壊的な諸力に立ち向かい、闘争することをもって、また癒し、赦し、和解することをもって成し遂げられるべきものである。隣人や社会の傷あるいはその痛みを無視し、平和なきところで宣言される平和は虚偽の平和である。「彼らは、おとめなるわが民の破滅を／手輕に治療して／平和がないのに『平和、平和』と言う」(エレミヤ書八・一一)。

イエス・キリストの十字架において(不義を受け入れることなく)不義なる人間を赦し、自らと和解させられる神の条件なき愛の物語は、人間の社会政治的状况のためになるような公的含意を持っている。すなわち、この物語は広く文化的慣習や期待や社会政治の制度を変革し、これらの新たな形成をもって、最も広範囲な公的領域としての神の国を地上における先取りとして具現するのである。破れ、分裂、差別、紛争、暴力といった現実の中で和解が実現されるためには、自らの変化を含む日常的生における個々人の変化と共に、社会政治的次元での慣習的、制度的、体制的变化が共に要求される。互いに隣接した場にある二つの集団間で、一方の集団が別の集団に危害を加えたり、二つの集団が互いに加害し合ったりするような状況があるとき、暴力の継続的悪循環を中止させ、そこに平和をもたらすために必ず求められるのは和解である。ある集団が別の集団から不当な加害を受け、ひどく苦しめられたとき、被害を受けた集団の構成員は自ら萎縮し、か弱い存在であると感じるものである。彼らはこの世を危険な場と認識し、他の集団に属する人々を敵と見なすことになる。したがって、彼らは闘争的となり、彼ら自身が他の集団に対して暴力をふるう加害者となり

易いのである。<sup>(5)</sup> 加害者に対する正義を要求し、被害者の生の質を向上させるために、そして加害者のみならず被害者たち自身が再び他者に対する加害者となることを妨げるために、個人的次元と共に社会的・公的次元での和解といたものが必ずや要求されるのである。

それなら、個人的和解と社会的和解との間には、どのような関係があるのだろうか。個人的和解は、被害者の傷つけられた人間性が回復されるときに起こる。この回復は神の働きである。和解の経験は犠牲者を新しい場へと連れ行く。時として、和解という経験は犠牲者を特殊な召命へと導くこともある。社会的和解のプログラムが成功を収めるには、和解を果たした個々人のリーダーシップが必要である。個人的和解は社会的和解を育成し、その強化を助ける。しかし、社会的和解が個人的和解へと還元されることは不可能である。社会的和解は社会的道徳的秩序を再樹立する過程である。社会的和解は道徳性に、すなわち正義に深く関心を傾けるのである。<sup>(6)</sup>

ロバート・シュライターによれば、個人的次元と社会的次元における悔い改め、赦し、和解の順序は同一ではない。個人的次元における和解の過程は、神による癒しの力を経験した犠牲者から始まる。すなわち、まず犠牲者の内側で内的な和解が起こる。神による癒しの力を経験した犠牲者は、加害者を赦すために神を呼び求める。犠牲者の内的癒しと和解とが悪事を行った人に対する赦しを可能とする。そして、この赦しの結果、加害者の悔い改めが期待される。つまり、加害者は被害者の赦しを経験することで悔い改めへと至るのである。したがって、和解の過程は、和解―赦し―悔い改めという順序をとる。<sup>(7)</sup> その反面、社会的和解は、悔い改め―赦し―和解という過程を踏む必要がある。つまり、社会的和解においては、公的和解とこれに伴う赦しとが最終的な和解をもたらすということである。社会的和解においては、公的正義を追及することが和解の過程に対する信頼性のために要求されるのである。<sup>(8)</sup> 個人的次元と社会的次元においては、和解の過程の順序が逆転するというシュライターの見解は、ラインホルド・ニーバーのキリスト教現実主義を想起させるものである。すなわち、個人的次元では悔い改め以前の和解と赦しも可能であるが、社会的次元では悔い

改めなき赦しと和解は不可能ということである。このことは、個人的次元においては愛の法（和解、赦し）が優先され、社会的次元においては愛の法が実現されるのは困難であり、したがって正義の法（悔い改め）が優先される必要があるということの意味する。

個人的和解については文化による違いに大きいものが見られないのに対し、社会的和解のほうは文化的偏差に大きなものが見られる。社会的和解が遂げられていない場においても、個人的和解は起こり得る。しかし、個人的和解が全然起こっていない場で社会的和解が遂げられるということは、想像するのも困難である。社会的和解の実現のためには、和解を遂げた一群の個々人による指導力が要求される。しかし、この個々人は社会的和解の必要条件ではあっても十分条件ではない。個人的和解と社会的和解の目的は相互に関連するものではあっても、同じものではないのである。個人的和解の目的が傷ついた人間性の回復と癒しにあるのに対して、社会的和解の目的は過去の暴力が再び起こらず、正義に基づいたより安全な社会をつくることにある。社会的和解の過程における真理と正義の問題は、決して無視されてはならない。<sup>9)</sup>

### III キリスト教的和解のビジョンと霊性

和解とは、単に心理的・社会的次元における人間的課題のようなものではなく、究極的には神学的次元における神の贈り物である。「和解は、単にわれわれが傾けるあらゆる努力の結果として起こるものではない。それは、われわれが神の民の物語の中に入って生きるときに受け、また享受することとなる特別な贈り物でもあるのだ」<sup>10)</sup>。キリスト教的和解は、一般の社会奉仕団体や政府機構の掲げる目標と混同されてはならない。キリスト教的和解は、ただ専門的技術や

プログラムや戦略などを用いて、この世の葛藤的諸状況を迅速に解決することではなく、問題ある状況を神の物語と結び付け、神の物語を通して状況を変化させることにある。

和解とは、何にも増してわれわれに与えられた新しい創造についての約束を実現して行かれる神の旅程である。キリスト者になるということは、新しい創造のためのこの旅程に参加することを意味する。聖書の物語は、和解のためになされた神の旅程をわれわれに見せてくれる。すなわち、聖書の神の物語は、破れや葛藤のあるこの世的状況において、神がどのように和解を成し遂げて行かれるか、見せてくれるのである。聖書物語のあらすじの核心は、創造、墮罪、和解、新しき創造である。聖書物語における神は、繰り返し神に反逆する人間のために和解の契約を更新され、新しい創造を約束される（イザヤ書六五・一七）。何よりもイエス・キリストの物語は、万物を和解させられる神のビジョンを明らかに見せてくれるものである。イエス・キリストの生と死と復活の中に現れた神の国のビジョンは、キリスト教的和解のビジョンの源泉なのである。

イエスの物語は、神による和解が不義なる人間に対する神の対価なき赦しを通して成し遂げられたことを示してくれる。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ二三・三四）。自分を十字架に架ける敵対者たちのためになされたこの赦しの祈りによつて、全ての罪人が、神の恵みにより、対価なく赦しを受けて神と和解することとなり、他の人々とも和解できるようになった。神の赦しは対価なくして与えられるものの、それはただ人間の罪に対して目をつぶり、その不義を受け入れるような安価な赦しであるのではない。しかし、神の愛は神の正義よりはるかに大きく深いものである。十字架は、単に神の正義を満足させるためになされた人間の出来事ではなく、人間へと向かう神の自己犠牲的な愛の出来事なのである。神の赦しは、まさにこの神の自己犠牲的な愛から出てくる。その子をわれわれのために差し出してくださることをもつて、われわれの罪を赦し、われわれを神と和解させてくれるこうした神の自己犠牲的な愛が、この世における個人と個人、集団と集団間の赦しと和解を可能にするのである（ガラ



テヤ書三・二六―二八)。

キリスト教的和解における靈性の核心は、和解が究極的に神の愛の贈り物として与えられることを信じることにある。われわれは和解のために働くことはできるが、和解をつくり出し、これを成し遂げることはできない。和解を成し遂げられる方は神である。イエス・キリストにおいて贈り物として与えられる和解は、キリスト教的和解の神学と靈性の核心である。イエス・キリストにおいて与えられる神の和解の贈り物からキリスト者の和解の使命が与えられる(Ⅱコリント五・一八―一九)。

シュライターは靈性としての和解に関するパウロの教えの要点を次の五つに要約している。<sup>(11)</sup>第一に、和解は神の働きである。神は犠牲者の生の中で和解の働きを始められる。神は加害者が破壊しようとした犠牲者の人間性を回復させてくださる。和解という経験は、傷ついた人間性が神との関係において回復される恵みの経験である。和解が神の働きであるのなら、われわれは「キリストの使者」(Ⅱコリント五・二〇)である。和解は、われわれを通した神の働きの中で発見されるのである。第二に、靈性と戦略は、両者の均衡とその間に相互作用が必要である。戦略が行動と実践を通して靈性に形を提供するのであれば、靈性は戦略を導く必要がある。第三に、和解の経験は犠牲者と加害者と共に新しい被造物とする(Ⅱコリント五・一七)。神が回復させられる人間性は、不義や暴力といった苦しみの経験を否定したり忘却したりさせるものではなく、その経験を変革させるものである。犠牲者の回復した人間性は、苦痛を伴う暴力についての経験を新しい目的に向けて変革された形態へと包むこととなる。第四に、新しい人間性を創造する和解の過程は、神の和解の「原型物語(master narrative)」であるイエス・キリストの苦難と死そして復活の物語において発見される。われわれが持つ苦しい暴力の経験は、キリストにおいて神がなされた働きに関する物語の中で変革されるのである。第五に、和解の過程はキリストにおける神の世界の完成と共に完成するのである。



#### IV 真実と和解

和解の出発点は、過去を忘却したり抑圧したりするようなことではなく、過去に直面し、過去の真実を糾明することにある。真実とは、起こった出来事とその出来事に関して語られた事柄の間の一致を意味する。実際に起こった出来事が回復されなければならない<sup>(12)</sup>。和解は過去に関する真実の記憶に基づく必要がある。すなわち、社会の道徳的秩序を再建するためには、起こった出来事についての真実が樹立されなければならないのである。かつての体制下にあつて恣行された過酷な人権蹂躪や集団的暴力に関する真相を明らかにすることによって、過去について共有される真実を樹立することが和解を遂げるための先決条件なのである。「嘘に基づいたり、現実から顔を背けた仕方ではなされる和解というものは真の和解ではなく、そのような和解は長続きすることなどできない<sup>(13)</sup>」。真実が癒しと赦しと和解の基礎なのである。

加害者により一方的に起こされた暴力の真相を究明することは、被害者の罪なきことを立証することで、被害者の精神的苦痛を緩和する助けとなる。同様に、真実を宣告することは、世が暴力を受け入れないということを示すことによつて、被害者を安堵させ、この世との関係を回復できるようにする。さらに、加害者がむしろ被害者を非難しながら、自らこそは被害者であるといった主張をする場合に、加害者の暴力的行動の真相を明らかにすることは、加害者がもうそれ以上そのような主張をできなくなるようにする。

真実はしばしば非常に複雑である。つまり、加害が一方的なものでなく、双方向的なものであるという場合が、時として見られるのである。しかし、かつてのこうした歴史が加害者の暴力を正当化することはできない。加害者が自らの

暴力行為の真実を直視することができないなら、癒しも赦しも和解も困難である。ルワンダの集団虐殺から生き残った一人の女性はこの語った。「万一、彼らが私に真実を語らないなら、万一、彼らが自分たちの行ったことを認めないなら、どうしても私は彼らを赦すことができませんか」<sup>(14)</sup>。

二〇世紀には、諸国において暴力や分裂により染みのこびり付いた過去を清算し、新しい未来へと出て行くために、真実委員会というものが構成された。真実委員会は、過去の特定期に起こった集団的暴力や深刻な人権侵害に関する真実を糾明し、過去を清算することをもって分裂や敵対心を克服し、新しい和合へと至る未来に向かい行くための門を開くことをその目標としている。真実委員会の役割は、傷を癒し、共同的未来をつくるための最初の段階として真実を明らかにすること、すなわち葛藤や邪悪な犯罪という遺産を文書に記録し、事実認定をすることである。<sup>(15)</sup>つまり、真実委員会の任務は、特定の時期や体制において起こった暴力を記録し、暴力の主たる原因を究明し、今後は同様なことが二度と起こらないようにするための措置を提案することである。真実委員会は、司法的裁判を通して「認定、責任性、市民的価値を示す新しい国家的物語においてその出来事を規定すること」<sup>(16)</sup>を助けるのである。

過去に関する真実糾明は、報復的正義とは異なる修復的正義<sup>(17)</sup>のためのものである。ミユラー・ファーレンホルツによれば、「記憶という技術は、後ろを振り返る行為にあるのではなく、生き生きとした未来志向的社会を建設するために、過去の苦しみを変形させる努力をすることにある」<sup>(17)</sup>。したがって、真実委員会は真実についての糾明を越えて、和解を促進するよう委任を受けるのである。真実委員会の焦点は真実を調査し糾明することにあるが、この真実とは社会あるいは国家全体の和解のためのものである。南アフリカの「真実和解委員会 (Truth and Reconciliation Commission 以下 TRC)」は、真実糾明を越えて「過去の葛藤や分裂を越えて立つ理解という精神において、国家の一致と和解を促進するよう」委任された。<sup>(18)</sup>他の真実委員会とは異なり、TRCは赦免権や修復的正義のための権限を付与された。すなわち、TRCは自らの暴力行為を自白し、その行為が政治的動機によるものであったことを示す加害者である場合に

はその人を赦免し、犠牲者と生存者のための補償を提案できるという権限を付与されたのである。<sup>(19)</sup> TRCは公開聴聞会を通して、犠牲者たちが加害者を赦すよう誘導した。TRCによる報告書は、被害者と加害者の間の多様な赦しと和解の物語を掲載している。<sup>(20)</sup> TRCが赦しと修復的正義を強調したということは、議長であるツツ大主教をはじめとするキリスト教指導者たちの影響によるものであったと言いうことができる。公開的な証言過程は、TRCの最も大きな成果として評価されるものである。<sup>(21)</sup>

## V 悔い改めと赦しと癒し

加害者の悔い改めと赦罪なくしては、真の和解と平和は困難である。それらは真の悔い改めと赦しによる相互的関係の回復を通して具現する。和解は加害者の悔い改めを被害者が受け入れ、赦し、抱擁することによって成就する。加害者が自らの責任を認め、自分の行動について謝罪し、赦しを求めることは、被害者が加害者を赦すことに寄与する。<sup>(22)</sup> 当然のことながら、悔い改めが赦しをもたらすわけではない。しかし、悔い改めがなければ赦しは難しい。人間にとって赦しとは、過去に支配されないことである。赦しは、別の未来のために決断することである。しかし、赦しは過去を無視したり忘れたりすることを意味するのではない。過去を無視したり忘れたりすることは、犠牲者を見下し、犠牲者が受けた苦しみや痛みをつまらぬことと見なすことである。

赦しとは忘れることではなく、他の仕方で記憶することである。われわれはわれわれに起こった出来事を忘れることはできない。われわれの記憶の一部を消すことは、われわれの人格的アイデンティティの一部を消すことである。しかし、われわれは和解と赦しを経験した後に、神の観点から別の仕方ですべてを記憶することができる。われわれが過去

を忘れるのであれば、それは過去の否定的な感情にもうこれ以上とらわれないということを意味する。<sup>(23)</sup> 赦しは、傷をもたらしただけの行為に關することではない。赦しは、犠牲者が加害行為の持続的な影響と、それを持つ關係に關することである。過去の行為が帳消しにされることはない。「犠牲者が、他者を赦すことができる」ということは、その人が自らの生を支配し、指示する力を持った行為から自由となる地点に到達したということのしるしである」。<sup>(24)</sup> 赦しは、犠牲者がかつて傷を受けた出来事が指示する軌道には従わず、別の未来の方向を選び取ることなのである。

赦しの力は、究極的には神から来る。神はあらゆる赦しの源泉である。神はまさに赦しにおいて自らの力を現される。赦しの力は愛の力である。神の愛は赦しを可能とする。神の愛による赦しは、イエス・キリストの十字架に現れた（ルカ福音書二三・三四）。イエス・キリストにおいて、犠牲者は神を呼び求めることをもって、赦しが神から出て来るということを認め、神の赦しに参与する。われわれは皆、誰かからの被害者であると同時に誰かに対する加害者である。神の恵みによってわれわれ自身の罪が赦され、われわれの人間性が回復されるように、神の恵みによって加害者の悪行も赦され、彼らの人間性も回復され得るのである。

公的神学においては、赦しはただ個人的・私的次元のことではなく、社会的・公的次元から理解される。つまり、ここで赦しというのは、一つの集団、民族、国家全体が別の集団、民族、国家全体の暴力や加害を赦す行為として見なされる。国家的次元における和解は、個々人の間での赦しのみならず、諸集団（人種、民族、階層、性などの違いによる）間の赦しと、より平等な社会・経済・政治的制度の樹立を含むものでなければならない。シュライバーは、政治的・公的領域における赦しというものが四つの要素、すなわち道徳的眞実、寛容、共感、そして破壊された人間關係を回復するための献身によって構成されると述べる。<sup>(25)</sup>

個人的關係のみならず社会的關係においても、赦しは、<sup>(26)</sup> それが必ずしも加害者（集団）から何らかのものを要求しなければならぬということではないのである。悔い改めが赦しに寄与することはできても、それが赦しの必要前提条件

であるというわけではない。<sup>(27)</sup> 悔い改めがなくても赦しは可能であるということは、イエス・キリストにおいて対価なく与えられる神の赦しに基づいたキリスト教的和解の神学の本来的特徴である。神は、われわれがまだ悔い改める前の罪人であつたとき、イエス・キリストにおいてわれわれの罪を赦してくださつた。この赦しは、神の限らない愛の表現である。神の赦しには、人間の悔い改めを呼び起こす力がある。われわれがイエス・キリストにおいて現された神の限らない愛の赦しを真に経験するときにわれわれは悔い改めることになるのであり、神との（そして隣人との）和解の道へと歩み出さずにはいられなくなるのである。

悔い改めない加害者を赦すことは極めて困難なことである。同様に、被害者が加害者を赦しても、加害者が最後まで悔い改めないのなら、その赦しは実際には効力を發揮できず、したがつて真の関係回復、すなわち和解は不可能となる。それにもかかわらず、聖書は悔い改めなき敵といえどもこれを赦すように教える。なぜなら、それは神がイエス・キリストにおいて神と敵対していたわれわれの罪を赦してくださつたからであり、この赦しには悔い改めを呼び起こす力があるからである。そして、加害者が最後まで悔い改めないことで、被害者と加害者との間の真の和解が不可能となる場合には、被害者が加害者に施しはしてもその効力を發揮できなかった赦しが地に落ちてしまうというわけではなく、神のいつそう大きな恩寵として、それは後に被害者に返ってくることになるにちがいないのである（マタイ福音書五・四四―四八）。

赦しと癒しの両者は循環関係にある。一方で、赦しは癒しを前提とする。集団虐殺（ユダヤ人虐殺、ルワンダでの虐殺）のようなむごたらしい出来事から、かろうじて生き残つた生存者たちに対して、いったい誰が大胆にも加害者を赦すようにと要求できるだろうか？ これらの人々は、特に加害者集団との関係においては、自分たちを非常に矮小な存在と感ずることになるため、こうした状態にあつては真に加害者を赦すことなどできないものである。このような状態において加害者を赦すということは、真の赦しに至ることではなく、加害者の力に対して心理的に屈服するということ

となるであろう。それゆえ、真の赦しが起こるためには、まず加害者に対する心理的屈服から脱け出すことが必要である。つまり、赦しは被害者の心理的癒しを前提とするのである。

他方、赦しは癒しをもたらす。赦しは被害者の精神的健康、すなわち癒しのために有益である。ミュラー・ファールンホルツによれば、「赦しは、悪なる行為が二人の人あるいは集団間にもたらされた歪曲、すなわち強奪を受けた力や無気力といったものを矯正する」<sup>(28)</sup>。赦しは、怒りや復讐心からの自由をもたらしてくれる。われわれが赦すとき、われわれは心理的・霊的な重荷を下ろすことになる<sup>(29)</sup>。換言すれば、赦しは被害者を過去の束縛から解き放ち、その人に新しい未来を開くのである。

和解が起こるためには、被害者だけでなく加害者も癒される必要がある。しばしば、加害は一方的なものではなく双方向の場合が多いものであり、したがって双方共に加害者であると同時に被害者であるという場合が多い。同様に、加害者と被害者が明らかに区別できる場合ではあっても、ある集団が別の集団に対する加害者となるのは、以前それとは別の集団から危害を被っていたがゆえである、というような場合がしばしば見られる。このような場合ではなくとも、加害者は自ら自分の暴力的行動によって傷を負うものである。加害者は、自分が他の人々に危害を加えるとき、自らに負わされた傷から癒される必要がある。癒しは、加害者をして自らの行動を振り返るようにし、被害者の苦しみや痛み<sup>(30)</sup>に共感して、和解へ導く過程に参加するようにするのである。

## VI 正義と和解

正義は和解に必須の構成要素である。正義が無視された和解は偽りの和解である。特に、社会的和解は正義を要求す

る。犠牲者たちが被った深刻な暴力による苦痛は、単純に無視され得るものではない。抑圧的状态から何も起こらなかったかのように、単純に解放状態へ移行行くことはできない。不義によって綴り合わされた過去とは真つすぐに対面しなければならぬ。正義とは、過去の悪行（あるいは善行）がそのまま明らかにされ、それに相応する報いが成し遂げられることを言う。正義を追い求めることのない平和は、偽りの平和である。抑圧に対する抵抗、不義に対する預言者的批判、自由のための闘争などは、和解と平和の前提条件である。われわれは殺人者の犯罪を単に「なかつたこと」と見なすことで、殺人者を赦すことはできない。それなら、いつでも正義が先行されてこそ和解は可能となるのだろうか？

正義なくしては和解もないという立場を固守する人々がいる。過去の過ちに対する告発や責任の追及なくして、また過去に受けた傷の癒しなくして、そのまま過去を埋葬し、忘れ、これを赦そうとする態度は、決して真の関係回復、すなわち和解と平和をもたらすことはできない。したがって、和解以前に正義は必ず先に実現される必要があるということである。しかし、正義が厳格に実現されてこそ和解も可能となるのであれば、和解は永遠に不可能となるにちがいない。なぜなら、この世から正義が厳格に実現されることはほとんど不可能であり、不義を行った者が全く悔い改め、心から赦しを求めることも非常にまれだからである。したがって、このような立場では、不義が依然として蔓延している現実の中で新しい未来を創造するために和解を遂げるというビジョンを提供することはできない。

ヴォルフは「正義が先で、そのあとに和解が」という命題の問題点を三つ指摘している<sup>(31)</sup>。第一に、正義はある程度特殊な個人や集団などによって相対的に理解されるということである。各個人や諸集団は、それなりに正当な理由を提示しながらも、互いに自分たちこそ被害者であつて、相手が加害者であると主張するものである。その上、いかなる正義の追求も部分的には不義に依存しているところがあり、なおかつそれが新しい不義をつくり出しもする。われわれの行動は曖昧さを避けれないものであつて、少なくとも部分的には不義なものである。厳格な正義というものは不可能



であるため、厳格な正義を前提とする平和というものは不可能なのである。したがって、平和のためにはしばしば「正義」ではなく「可能な限りにおける正義」が要求されるのである。第二に、厳格な正義が可能だとしても、果たしてそれが望ましいことであるかは疑問ということである。第三に、正義が満足できるとしても、葛藤という関係にある当事者たちは継続して不和なる関係にあり得るということである。正義による満足は、かつての過ちを矯正することはできても、犠牲者と加害者の間の交際を創造することはできず、したがってそれは真に（他者との関係性がわれわれ自身の構成要素である）われわれを癒すことはできないのである<sup>(32)</sup>。

正義には処罰的 (punitive) あるいは報復的 (retributive) 正義と修復的 (restorative) 正義がある。処罰的正義とは、犯罪者を逮捕、裁判、判決、処罰するものである。処罰的正義は、加害者に対する処罰に焦点を合わせる。しかし処罰的正義はしばしば報復的正義へと変貌する。次のようなヴォルフの言葉は、反芻してみる必要がある。「真心からの真実追求に正直でないことは頻繁であり、正義のためになされる非妥協的な闘争には不義が非常に多いものである」<sup>(33)</sup>。これとは異なつて、修復的正義とは、加害者、被害者、共同体に対して共に焦点を合わせる。処罰的正義における補償が加害者に対する処罰を意味するのであれば、修復的正義における補償は、危害を受けた人々に有益となるよう行動することを意味する。修復的正義は、加害者の行動に対する責任的補償を被害者に提供し、葛藤を解決し、共同体の修復を目指すとする。ここでは、被害者のための正義を追求しつつも、同時に加害者・被害者・共同体の間の調和を修復する道を探そうとする。ハワード・ゼアによれば、「修復的正義は真つすぐに直すこと、和解、新しい確信を促進する解決を追求することにおいて、被害者、加害者、共同体を含む」<sup>(34)</sup>。修復的正義は、加害者と被害者の間の対話を通して、加害者の不義な行動に対する責任を問うだけでなく、社会あるいは国家共同体の中に赦しや和解の雰囲気をつくらうとする。

キリスト教信仰における「正義の後に、赦しと和解が」という命題に対する対案は、キリストの十字架物語において

発見される。イエス・キリストの十字架において現された神の正義は、罪人を処罰するというような正義ではなく、罪人に代わって自らの子を犠牲とすることをもって、罪人を「義とする愛の正義」(justifying justice of love)である。十字架における審判者(the Judge)が被審判者(the Judged)となり、われわれの罪を自らに転嫁して、われわれの代わりに審判を受けることにより、自らの義をわれわれに転嫁する。神のこのような愛の正義は新しい関係の回復、すなわち、和解をもたらすのである。神の愛の正義に基づいたキリスト教的和解の神学は、処罰的正義ではなく修復的正義を追求するのである。

和解の追求において、われわれはわれわれ自身が正義を代表し、相手は不義を代表するというような二分的な考え方ではなく、われわれ自身と相手の双方の中に、正義と不義が混在しているという考えを持つ必要がある。このような考えを持つとき、われわれはなぜ、神による一切の条件なき恵みが道徳的判断より優先されなければならないのかが理解できるようになる。神の御前にあつては、義人は一人もいないのであり、すべてが罪人である(ロマ書三・一〇―一二)。したがって、神による一切の条件なき恵み、つまりイエス・キリストにおいて現された神の愛の赦しによらなければ、誰も義とされることはあり得ないのである。このことが、なぜ平和や和解のためには正義の要求よりも恵みのほうが優先されなければならないかを示してくれるのである。

もちろん、真の和解のために正しいことと誤りとを区別し、その誤りについてはこれを正そうとする努力は非常に重要である。正義の実現は正しい関係形成の基礎である。それゆえ、正義に対する関心が弱まることは決してあり得ない。しかし、正義は恵みという、より大きな枠の中で追求されるべきものである。恵みから分離した正義の追求は、暴力を正当化することをも可能とする。恵みによる和解は、厳格な正義という土台の上に樹立されるものではない。キリストがわれわれのために死んでくださったことをもって、神がわれわれに対する自らの愛を確証されたのは、「わたしたちがまた罪人であつたとき」(ロマ書五・八)のことである。悪と不義は拒否されても、悪を行う人がまだ悔い改め

には至れずにおり、したがって未だ正義が全き仕方では具現できないでいるような状態で、そうした悪を行う人を愛によつて赦し、両腕で抱擁することによつてかなう、恵みによる和解は、悪と不義の存在を避けることのできないこの世において、平和を創造するための唯一の道である。この和解は、未だ依然として排他的かつ閉鎖的な孤立を追い求めている人々のいる状況において、そしてまた完全な正義と調和が実現され得ずにいる状況において、具現されなければならないのである。

## VII 和解の働き人と和解の旅程

キリスト者は、この破れた世にあつて和解の働き手としての召しを受ける。和解は瞬間的な問題解決というような事柄ではなく、一つの長い旅程である。オードリー・チャップマンは、和解の過程が、社会的次元においては次の六つの段階で構成されるという。<sup>(35)</sup>第一は、過去にあつた葛藤、暴力、虐待に関する真実の糾明である。第二は、被害者の傷と喪失、そしてそれに対する加害者（沈黙することで暗黙的に同調する傍観者たちを含む）の道徳的責任を認めることである。第三は、加害者に対する被害者の寛容、すなわち復讐心を棄て、新しい未来に向かって歩み出すことである。第四は、犯罪者たちを調査、起訴、処罰するといった処罰的正義とは異なつて、不義を正し、被害に対する補償をし、関係性および未来の行為における建設的な変化を目標とする修復的正義の樹立である。<sup>(36)</sup>第五は、加害者（集団）に対する被害者の赦しと共に、共存しようとする意志を持ち、両者の敵対的關係を直そうとする双方の努力である。第六は、新しい共同的未来に対するビジョンの樹立である。

キリスト教的和解の旅程は、イエス・キリストにおいて現された神の和解の物語と共に始まり、聖霊の導きに従い行

くものである。和解の旅程を進み行く和解の働き人には、次の四つの事柄が必要である。

### (1) 一歩後ろに退くこと

和解の働き人として和解の旅程を始める前に、そしてその旅程のただ中で、われわれはいつでもキリスト教的和解のビジョンであるイエス・キリストにおいて与えられている神の和解の贈り物についての物語を新しく記憶するために、一歩後ろに退く必要がある。後ろに退くことは、和解という使命を遂行するための前提条件である。「キリスト者たちがこの世の状況を正しく見つめ、火のついた世界の向こう側からやってくるビジョンを生かし抜くような新たな可能性を想像するために必要なことは、一歩後ろに退く能力である……退くということとは、破れた世から逃避することではなく、この世に向かう神についての想像力を受け入れることである」<sup>(47)</sup>。われわれが、破れや葛藤という状況にあつて和解の働きを正しく遂行するためには、いつでもイエス・キリストのように、まずは破れや葛藤という状況から一歩後ろに退き、祈りと瞑想と礼拝の時間を持つべきである（マルコ福音書一・三五）。祈りと瞑想と礼拝のただ中で、神の臨在と和解の贈り物を新たに経験することが、和解の働きの前提である。

### (2) 嘆息と悔い改め

破れた世において和解の旅程を始めるキリスト者が第一になすことは、嘆息と悔い改めである。嘆息とは破れによる傷や苦しみからくる呻きであり、絶叫である。嘆息は安価な慰め（エレミヤ書三一・一五）や偽りの評価についての約束（エレミヤ書六・一四）を拒絶する。しかし、嘆息はただ悲観的な絶望の叫びではなく、神に向かう叫びである（詩

編二・一―二）。嘆息は叫びによる祈りである。しかし、われわれはただ破れた状況のためだけに嘆息するというところに留まっていることなどできない。われわれは、われわれ自身を、破れた状況の中にあつて和解を具現すべき解決請負人としてのみ考えることはできない。われわれは、まさにわれわれ自身が破れや分裂の一つの原因であるということとを悟らなければならない。戦争は、いつでも平和という名をもつて始められる。キリスト教は神の平和を守るという名目をもつて、十字軍による戦争を自ら行つた。一九三〇年代には告白教会を除いたドイツの教会および教会指導者たちは、ナチ当局に同調した。一九九四年のルワンダで起こつた人種虐殺の現場の中には教会も存在したし、キリスト者も、またはなほだしきは牧会者も虐殺に加担したのであつた。南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策は、教会（改革教会）の支持の中で維持されたものであつた。われわれは、われわれ自身が破れや分裂のただ中にあるこの世の一部であるということを記憶する必要がある。われわれ自身が問題の一部であるということをわれわれが認識するとき、われわれはまさにわれわれ自身のために嘆息しないではいられなくなる。自らのために嘆息するということは、悔い改めを意味する。他者を変えようとする前に、われわれ自身がまず変わらなければならないのである。われわれは、われわれ自身がまず変化し、和解を経験することをもつてこそ、他の人のための和解の働きを正しく遂行することができるのである。変化は神の恵みによつて与えられる贈り物である。悔い改めと変化は一瞬の出来事ではなく、神と同行する旅程の中で、絶えず起こるべき出来事である。「回心とは、われわれを新しい未来に向けて、新たに忠誠を誓う新しい人へと変えようとされる神に同行し続ける旅程である」<sup>(38)</sup>。この旅程を通して、われわれが、われわれに対して傷をもたらしただ加害者を真に赦し、併せて共に親しい交わりを分かち合える人として変化するときに、われわれは真に和解の働き人となり得るのである。<sup>(39)</sup>

### (3) 共感と理解

和解の旅程においてキリスト者のなすべき最も重要なことは、危害を被り傷つけられた個人や集団の苦痛に共感し、その痛みを共に分かち合うことである。共感とは傷を癒し、その苦痛を軽減する。共感するには、破れのある現実にあつて傷つけられた人々と共に生活し、彼らの痛みを共に経験する必要がある。また、被害者たちが自ら癒しや赦し、それに和解の過程に対して能動的に参与できるよう、彼ら自身の声を探し求め、彼らに力を吹き込んであげる必要がある。併せて、加害者の暴力を触発し、これを放任した諸要因に対する理解も必要である。加害者の行動は、社会的・文化的・心理的影響力への応答とすることができ、ルワンダでの集団虐殺の場合、そこには多くの社会的諸要因があつた。すなわち、社会経済の政治的混乱や内戦、他集団に対する差別の歴史、敵対心を強める指導者の扇動、権威に対する復讐心、他集団に対する暴力の歴史、社会内外における受動的傍観、そして加害者に対する支持や共謀といった諸要因が、集団虐殺を助長したのである。<sup>(40)</sup>このような諸事実は、果たして加害者たちの責任を軽減できるものではないとしても、それらに対する理解は、赦しをより少しでも容易なものとし、癒しの助けとなり得るのである。さらに、加害者集団が、かつて被害者たちの受けた被害を現在の被害者集団によつて知らされるといふことも和解の助けとなる。ルワンダでツチ族を集団虐殺したフツ族は、かつてツチ族の支配下にあつたとき差別されており、ツチ族との闘いではフツ族が殺されるということもあつたのである。<sup>(41)</sup>

#### (4) 多様性と相違とを認めること、抱擁すること

和解は、当事者が互いの相違を認め、抱擁することを通して実現される。キリスト教の和解の神学は、多様性や相違というものがただ威嚇となるというのではなく、それらは神の創造の秩序に基づくものであると同時に賜物でもあるということとを認めるものである。多様性と相違なくしては調和も美しさもない。他者との関係における相違は、私のアイデンティティの本質的構成要素なのであり、他者との関係の多様性は、私のアイデンティティを豊かなものとする要因である。人間は多様性と相違とを認めること、また抱擁することを通して和解を具現すればするほど、神の似姿へと近づくのである。しかし、多様性と相違とを認めること、ならびに抱擁することは、単に多元主義的な価値観を受容するということを意味するわけではない。多元主義は多様かつ相違ある諸々のことが全て同等な条件や状況にあるということとを前提とする。しかし、われわれは皆全て同じ条件や状況にあるというわけではない。われわれの間には富める者と貧しい者、健康な人と病者、強者と弱者、加害者と被害者がいる。真に和解が実現するためには、か弱き者をより貴い者として受け止め、その人を守る必要があり、またか弱き者が被る苦しみや痛みに参加することが求められる（1コリント二・二四―二六）。

#### (5) 共同の目標のために共に働くこと

互いに対する敵愾心や否定的見方を克服することを可能にする一つの道は、共同の目標のために共に働くことである。共同の目標のために共に働くことで、互いの人間性や類似性を経験することが可能となり、加害者と被害者の間に



おける赦しと和解の促進も可能となり得るのである。<sup>(42)</sup> 大きな苦しみを経験した後には、他の人々を助けるために、そして暴力なき世を創造するために共に力を合わせることは、「苦しみから生まれる利他主義 (altruism born of suffering)」<sup>(43)</sup> と言い得る。教会とキリスト者は、政府やその他の多様な次元の社会組織ならびに諸団体と協力して、このような共同の参与を促進することができるのである。

## VIII 結論

キリスト教がしばしば葛藤や紛争の原因となり、さらに歴史上最も醜悪なる戦争の数々がキリスト教信仰の名によって引き起こされてきたということには違いない。しかし、本来キリスト教は葛藤や紛争ではなく、和解や平和の根源である。昨日と今日（そして、おそらくは明日）のあらゆる過ちにもかかわらず、キリスト者は世の希望である。この世の葛藤や紛争を終結させ、和解と平和を具現することは、キリスト教にとって最も本来的な公的課題である。和解のためのキリスト教の公的課題は、ただ葛藤を仲裁する具体的な方法や戦略を提示するということではなく、破れのある現実の向こう側に新しい和解の現実に関するビジョンを示し、対案的な生のパラダイムを提示することである。

キリスト教的和解の神学の核心は、イエス・キリストの生と死ならびに復活において体験された和解の使信と靈性にある。イエス・キリストは、悪なる人間たちの暴力によって最もはなはだしい苦しみを被った犠牲者として、彼らを神の愛によって赦すだけでなく、彼らの罪を負って死ぬことをもって、全ての人間と神、またあらゆる加害者と被害者との和解をもたらした。この和解の使信は、犠牲者が自らの物語をイエスの物語の中に入れ置くことをもって、イエスと共に和解した人間として変わるようにする。また、この和解の靈性は、キリスト者をして犠牲者たちの苦しみに加わ

るようにさせ、彼らの（またさらには加害者の）人間性回復のために努力することをもって、個人的・社会的次元での赦しと和解の働きに献身するようにする。

和解の旅程は、全地球的な巨大なビジョンからというよりは、具体的な日常生活から出発する必要がある。私のことを裏切り、私に深い傷を負わせた人に対する怒りに捕らわれている私の生、私が所属している地域社会の破れた現実、和解の旅程とはこのような日常的な生の中から出発しなければならないのである。われわれは、毎日の日常的現実深く参与することをもって、神の創造された和解のビジョンを提示する必要がある。「和解とは、最も平凡かつ単純かつ日常的な現実の中で、教会が超越的なビジョンに対して忠実なものとなり、また粘り強く生きるときに成就するものである。……和解とは、殺人者と被害者の家族が一緒に作業する中、しばし休みをとる間に、同じ一つのカップでバナナ酒を飲むことなのである」<sup>(44)</sup>。

和解の旅程なるものは、神の恵みの贈り物と共に出発するのではあるが、この旅程の中において、われわれは時として非常に厳しい困難や苦難を経験し得る。しかし、われわれは落胆したり、潰れてしまったりはしない。なぜなら、まさにそのような困難や苦難を通してイエス・キリストの命が現れ、和解の出来事が成し遂げられることになるからである（Ⅱコリント四・八―一一）。

## 訳注

（訳注１）‘public theology’は、日本では一般に「公共神学」と訳され、韓国でもこれまで広く「公共神学」と訳されて来た。し

かし、最近は主として長老会神学大学校の教授たちにより構成される「公的神学と教会研究所 (Institute of Public Theology and Church)」をはじめとして、これを「公的神学」と訳す人々が増えつつある。尹哲昊教授の用語は、こうした状況を踏まえたものである。

(訳注2) 尹哲昊教授は本稿において 'Restorative justice' の訳語に「回復的正義」という言葉を当てている。しかし、日本ではこれが一般に「修復的正義」と訳されていることを踏まえ、邦訳では「修復的正義」の訳語を当てることとした。しかし、この「回復的正義」とは別に使われる「回復」という語については、その意味上の理由から「修復」とせず、そのまま「回復」と訳出してある。

(訳注3) 言うまでもなく、ここでの「我が国」とは「韓国」のことである。

## 注

(1) 三星経済研究所の発表によれば、二〇一〇年の我が国<sup>(訳注3)</sup>における葛藤関連費用は八二―二四〇兆ウォンであり、その葛藤指数はOECD国家の中で二番目となっている。その費用を最大の二四〇兆ウォンとすると、これは国内総生産の五分の一に該当するものであつて、全国民が税金を一文たりとも支払わなくてよくなるような途方もない金額である。しかし、実際の生活において精神的かつ物質的な葛藤にかかる費用は、お金で計算できるようなものよりもずっと深刻である。

△<http://www.yonhapnews.co.kr/economy/2013/08/20/325000000AKR20130820170600003.HTML>より。

(2) ベルギーによる植民地時代、分割統治という戦略に従つて、ツチ族は少数派であるにもかかわらず、植民的母国の力を得てルワンダ社会を支配した。しかし、フツ族を中心とした独立運動の結果、一九六二年にルワンダが独立すると、今度は多数派のフツ族が社会を支配し、ツチ族を弾圧した。△<http://actiontoday.kr/archives/7186>参照。

- (3) 昨年(二〇一五年十一月三日)、「フランスのバリでは、この人たちによって遂行された自爆テロならびに大量銃撃事件により一三〇名以上が死亡し、三〇〇名以上が負傷した。また今年(二〇一六年七月一日)は、フランス革命の祝祭を兼ねていたフランスの保養地ニースで、自生的なISであると明らかとなったチュニシア系一世のフランス人が大型トラックを運転し、数千名が集まっていた場へと突進して八四名が死亡し、百余名が負傷するというようなテロが発生した。犯人は死ぬ直前に「アラは偉大なり」と叫んだという。
- (4) 『朝鮮日報』、二〇一六年八月二六日A20。しかし、平和協定はFARCに対してあまりに寛大だという世論により二〇一六年一〇月二日の国民投票において否決されたため、政府は新たに修正平和協定を作成し、議會を通過させた。
- (5) L. I. McCann and L. A. Pearlman, *Psychological Trauma and the Adult Survivor: Theory, Therapy, and Transformation* (New York: Brunner/Mazel, 1990); J. L. Krupnick and M. J. Horowitz, "Stress Response Syndromes: Recurrent Themes," *Archives of General Psychiatry* 38 (1981): 428–35; Ervin Staub and Laurie Anne Pearlman, "Healing, Reconciliation, and Forging after Genocide and Other Collective Violence," Raymond G. Helmick, S. J. and Rodney L. Petersen (eds.), *Forgiveness and Reconciliation* (Philadelphia/London: Templeton Foundation Press, 2001), pp. 205–06.
- (6) Robert J. Schreier, *The Ministry of Reconciliation* (New York: Orbis Books, 1998, 2008), p. 111.
- (7) *Ibid.*, pp. 64, 114.
- (8) *Ibid.*, pp. 64–65, 115.
- (9) *Ibid.*, pp. 64–65, 116.
- (10) Emmanuel Katongole, Chris Rice, 『 화해의 제각도 〈和解の弟子道〉 』, 안중희 옮김 〈인・심・혼의 길〉 (서울 〈인문〉: 한국기독교학회출판부 〈韓國基督教學生會出版部〉, 2013), p. 31.
- (11) Schreier, *The Ministry of Reconciliation*, pp. 14–17.
- (12) 하버마스 (Jürgen Habermas) 에 따르면, 진실이란 내가 신뢰할 수 있는 자료로부터 내가 이해할 수 있는 방식으로 사실과 일치하는 것이다, Daan Bronkhorst, *Truth and Reconciliation: Obstacles and Opportunities for Human Rights* (Amsterdam: Amnesty International, 1995), pp. 145–46.
- (13) Archbishop Desmond Tutu, Chairperson's foreword, *Truth and Reconciliation Commission of South Africa Report*, vol. I (Cape

- Town: CTP Book Printers Ltd. for the Truth and Reconciliation Commission, 1998), p. 17.
- (14) Ervin Staub and Laurie Anne Pearlman, "Healing, Reconciliation, and Forgiving after Genocide and Other Collective Violence," *Forgiveness and Reconciliation*, p. 218.
- (15) Priscilla Hayner, "Fifteen Truth Commissions, 1974 to 1994: A Comparative Study," *Human Rights Quarterly* 16 (1994): 607.
- (16) Martha Minow, *Between Vengeance and Forgiveness* (Boston: Beacon Press, 1998), p. 78.
- (17) Geiko Müller-Fahrenholz, *The Art of Forgiveness: Theological Reflections on Healing and Reconciliation* (Geneva: WCC Publications, 1997), pp. 49–59.
- (18) Preamble, Promotion of National Unity and Reconciliation Act, 1995. *Republic of South Africa, Government Gazette* 361, no. 16, p. 579.
- (19) Audrey R. Chapman, "Truth Commissions as Instruments of Forgiveness and Reconciliation," *Forgiveness and Reconciliation*, p. 260.
- (20) Piet Meiring, *Chronicle of the Truth Commission: A Journey through the Past and Present Into the Future of South Africa* (Vanderbijlpark, South Africa: Carp Diem Books, 1999).
- (21) しかし、否定的な諸評価もないわけではない。南アフリカ共和国のアパルトヘイト (apartheid) を明示的あるいは暗黙的に支持していた大多数の白人たちが、自らの政治的・道徳的責任や罪過を認めるよう促すことは、これらの人々に対する被害者たちの赦しを促すことに劣らず重要なことであつたし、また加害者に対する被害者の赦しを促進することよりは、被害者が自らの悲しみや怒りの感情を表現できるようにするべきであつたという指摘がある。事実、公開聴聞会をもってこれを被害者と加害者の間における真の赦しをもたらした場とするのは難しい。また、TRCは、殺人、拷問、失踪、肉体的傷害といった個人的人権侵害にのみ集中した結果、国家的・共同体的次元におけるアパルトヘイトの制度的犯罪を看過し、和解を被害者と加害者間の赦しという個人的次元へと縮小させることになつたという批判もある。Brandon Hamber, "How Should We Remember? Issues to Consider When Establishing Commissions and Structures for Dealing with the Past," Centre for the Study of Violence and Reconciliation, Johannesburg, 1998. *Forgiveness and Reconciliation*, p. 269 からの孫引。

- (22) S. R. Freedman and R. D. Enright, "Forgiveness as an Intervention Goal with Incest Survivors," *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 64 (1996), pp. 983-92.
- (23) Schreier, *The Ministry of Reconciliation*, pp. 66-67.
- (24) *Ibid.*, p. 59.
- (25) 赦しの第一要素は「道徳的判断によって満たされた記憶」である。過去に関する道徳的眞実は、和解の未来へと向かうための先決条件として赦しの出発点となる。赦しの第二要素は、加害者に対する復讐を放棄する寛容である（これが必ずしも処罰の要求放棄を意味するわけではない）。赦しの第三要素は共感であって、この共感は理解の要素を含み、加害者の人間性を認めること、はなはだしきはその人が非人間的な行為をするときでさえそれを認めることである。最後に、赦しは新しい共同の政治共同体を形成するために、破れた人間関係をもちにつかみ取ることを要求する。Donald W. Shriver Jr., *An Ethic for Enemies: Forgiveness in Politics* (New York: Oxford University Press, 1995), pp. 6-9.
- (26) 社会は、これを個人のような仕方では赦すことはできない。社会的次元での赦しは、赦免として現れる。赦免とは、行われたことに対する合法的忘却である。赦免の下では、かつての犯法行為がもうそれ以上調査されることはないし、加害者は自らの行為についての非難や刑罰を受け入れる必要もないのである。Schreier, *The Ministry of Reconciliation*, pp. 124-25.
- (27) L. Gregory Jones, *Embodying Forgiveness: A Theological Analysis* (Grand Rapids, Mich.: Wm. B. Eerdmans, 1995), xi-xvii.
- (28) Müller-Fahrenholz, *The Art of Forgiveness*, pp. 4-5, 28.
- (29) M. E. McCullough and E. L. Worthington, "Promoting Forgiveness: A Comparison of Two Brief Psychoeducational Group Interventions with a 'Waiting List' Control," *Counseling and Values* 40 (1995): 55-69; J. M. Templeton, *Worldwide Laws of Life: 2000 Eternal Spiritual Principles* (Philadelphia: Templeton Foundation Press, 1997).
- (30) Ervin Staub and Laurie Anne Pearlman, "Healing, Reconciliation, and Forgiving after Genocide and Other Collective Violence," *Forgiveness and Reconciliation*, p. 208.
- (31) Miroslav Volf, "Forgiveness, Reconciliation, & Justice," *Forgiveness and Reconciliation*, pp. 38-40.
- (32) このような脈絡において、ヴォルフは赦しと正義の関係を五つに整理して、次のように説明する。第一、赦しは正義と無関係ではない。赦しは他者を何の条件もなしに受け入れるということではない。赦しには、悪と加害者に対する拒否や批

判がその前提とされている。第二、しかし、赦しは正義が完全に具現されなかったということを前提とする。万一、正義が完全に実現したのであれば、赦しは必要ないことにちがいない。赦しは厳格な正義が具現されなかったがために必要なものなのである。第三、赦しは正義の要求に先行するものであるため、冒険と約束を共に包含する。赦しは加害者が自らの不義を認めることのできる脈絡となる。赦しは加害者が自らの悪を認め、罪責感を持ち、悔い改めに至るよう導く。第四、最初の段階では、赦しにはいかなる条件も求められない。すなわち、赦しは加害者の悔い改めに基づくものではないのである。しかし、完結した赦しは条件なしで済むというものではない。悔い改めは、赦しの先行条件というよりは、可能なる結果なのである。悔い改めは赦しの結果として、悔い改めがないなら罪責感を拒否し、赦しを赦しとして受け入れることも拒否するのである。第五、悔い改めの他に、加害者から奪い取られたものに対する補償がなされるとき、赦しは(加害者으로부터)最もよく受け入れられるものとなる。Ibid., pp. 45-47.

- (32) Miroslav Volf, *Exclusion and Embrace: A Theological Exploration of Identity, Otherness, and Reconciliation* (Nashville: Abingdon, 1996), p. 29.

- (34) Howard Zehr, *Changing Lenses* (Scottsdale, Pa.: Herald Press, 1995), p. 181. 修復的正義については G. Brazenore and M. Umbreit, "Rethinking the Sanctioning Function in Juvenile Court: Retributive or Restorative Responses to Youth Crime," *Crime and Delinquency* 41, no. 3 (1995): 296-316 を参考のこと。

- (35) Audrey R. Chapman, "Truth Commissions as Instruments of Forgiveness and Reconciliation," *Forgiveness and Reconciliation*, pp. 266-68.

- (36) Martha Minow, *Between Vengeance and Forgiveness*, p. 91.

- (37) Emmanuel Katongole, Chris Rice, 『화해의 세가지』〈和解の第三道〉, p. 51.

- (38) Ibid., p. 162.

- (39) 南アフリカ共和国の「真実和解委員会」のすばらしい点は、当委員会がツツのような和解の指導者の導きによって歴史的  
不義に関する真実を「慈悲と赦しによる雰囲気のもとで明らかにし尽くした」というところにある。Ibid., p. 126.

- (40) Ibid., p. 221.

- (41) その上、加害者集団の中にも集権的勢力の誤った政策に反対して犠牲となった人々、また第二次世界大戦当時、ナチから



多くのユダヤ人々を救ったドイツのシンドララーのように、被害者集団の人々を助けようとした人々がいた。

- (42) T. F. Pettigrew, “Generalized Intergroup Contact Effects on Prejudice,” *Personality and Social Psychology Bulletin* 23, no. 2 (1997): 173–85.
- (43) E. Staub, “Basic Human Needs and Their Role in Altruism and Aggression,” manuscript, 1998, Department of Psychology, University of Massachusetts, Amherst. *Forgiveness and Reconciliation* p. 226 なるの添削。
- (44) Emmanuel Katongole, Chris Rice, 『 화해의 제자도 〈和解の第1道〉 』, pp. 143–44.

## 参考文献

- Brazemore G. and Umbreit, M. “Rethinking the Sanctioning Function in Juvenile Court: Retributive or Restorative Responses to Youth Crime.” *Crime and Delinquency* 41, no. 3 (1995).
- Bronkhorst, Daan. *Truth and Reconciliation: Obstacles and Opportunities for Human Rights*. Amsterdam: Amnesty International, 1995.
- Freedman S. R. and Enright, R. D. “Forgiveness as an Intervention Goal with Incest Survivors.” *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 64 (1996).
- Hayner, Priscilla. “Fifteen Truth Commissions, 1974 to 1994: A Comparative Study.” *Human Rights Quarterly* 16 (1994).
- Helmick S. J., Raymond G. and Petersen Rodney L. Eds. *Forgiveness and Reconciliation*. Philadelphia/London: Templeton Foundation Press, 2001.
- Jones, L. Gregory. *Embodying Forgiveness: A Theological Analysis*. Grand Rapids, Mich.: Wm. B. Eerdmans, 1995.
- Katongole, Emmanuel, Rice, Chris. 『 화해의 제자도 』. 안종희 옮김. 서울: 한국기독교학생회출판부, 2013.
- Krupnick, J. L. and Horowitz, M. J. “Stress Response Syndromes: Recurrent Themes.” *Archives of General Psychiatry* 38 (1981).

- Lederach, John Paul. 레더락, 존 폴 『화해를 향한 여정』, 유선금 옮김. 춘천 : Korea Anabaptist Press, 2010.
- McCann, L. I. and Pearlman, L. A. *Psychological Trauma and the Adult Survivor: Theory, Therapy, and Transformation*. New York: Brunner/Mazel, 1990.
- McCullough, M. E. and Worthington, E. L. "Promoting Forgiveness: A Comparison of Two Brief Psychoeducational Group Interventions with a 'Waiting List' Control." *Counseling and Values* 40 (1995).
- Meiring, Piet. *Chronicle of the Truth Commission: A Journey through the Past and Present Into the Future of South Africa*. Vanderbijlpark, South Africa: Carp Diem Books, 1999.
- Minow, Martha. *Between Vengeance and Forgiveness*. Boston: Beacon Press, 1998.
- Miller-Fahrenholz, Geiko. *The Art of Forgiveness: Theological Reflections on Healing and Reconciliation*. Geneva: WCC Publications, 1997.
- Pettigrew, T. F. "Generalized Intergroup Contact Effects on Prejudice." *Personality and Social Psychology Bulletin* 23, no. 2 (1997).
- Republic of South Africa. Preamble, "Promotion of National Unity and Reconciliation Act, 1995." *Republic of South Africa, Government Gazette* 361, no. 16.
- Schreier, Robert J. *The Ministry of Reconciliation*. New York: Orbis Books, 1998, 2008.
- Shriver, Donald W., Jr. *An Ethic for Enemies: Forgiveness in Politics*. New York: Oxford University Press, 1995.
- Templeton, J. M. *Worldwide Laus of Life: 200 Eternal Spiritual Principles*. Philadelphia: Templeton Foundation Press, 1997.
- Tutu, Archbishop Desmond. *Truth and Reconciliation Commission of South Africa Report*, vol. I. Cape Town: CTP Book Printers Ltd. for the Truth and Reconciliation Commission, 1998.
- Volf, Miroslav. *Exclusion and Embrace: A Theological Exploration of Identity, Otherness, and Reconciliation*. Nashville: Abingdon, 1996.
- Zehr, Howard. *Changing Lenses*. Scottsdale, Pa.: Herald Press, 1995.